

# 婦人宣教師、ミセス・プラインの 「おばあちゃんの手紙」(3)

～アメリカン・ミッション・ホームの  
創立者の一人～

小林 恵子

前回は「おばあちゃんの手紙」(二十九通)の内容のあらましを述べた目次と、日本に来るようになったいきさつを書いた序文を紹介した。今回からは「おばあちゃんの手紙」を年月日の順に二通ほど選んでとりあげ解説を添えて紹介していきたい。

最初の手紙は太平洋を渡って日本に向かう船室で故郷アルバニー(ニューヨーク州の州都)の孫たちに書いたものである。米国婦人一致外国伝道協会(WUMS)から派遣された婦人宣教師、ミセス・プライン、ミス・クロスビー、ミセス・ピアソンの三人は一八七一(明治四)年五月十八日、人々のあたたかい励ましに見送られ、ニューヨークを出発した。横浜で当時、社会問題となっていた混血児の養育と女子教育のために使命を担った旅だちであった。一行はシカゴを経由、サンフランシスコから太平洋航路定期船「ジャパン号」で日本に向かった。それ以前に来日した宣教師、ヘボンやバラなどはニューヨーク港から喜望峰を経てインド洋を通り上海から日本に来ている。日数からいえば太平洋まわりが短くはあったが途中で台風にあうと避難場がないだけこの

航路も危険であった。「ジャパン号」の航海は幸いにも最初の二日は海が大変荒れたものの全体としては順調であった。プラインは別の手紙で「乗客の中に数名の日本政府高官がおり親しく会話を交わしました。私は特に婦女子の教育の重要性を力説しました。私たちが部屋で歌を歌っていると、歌を教える学校を開いてくれないかと熱心に話してきました。日本女性は歌を歌わないそうです。」<sup>(1)</sup>と記している。この日本の高官の一人は伊藤博文であったといわれている。<sup>(2)</sup>明治初期、学校教育のうちで音楽教育のありかたを模索していた日本政府高官たちが米国の婦人宣教師たちの歌う讚美歌の美しい歌声に強い関心を抱いた様子がこの手紙からよみとれる。また、クロスビーは「日本が近づくにつれ私たちの事業に対して一段と現実的な思いがしてきました。」と日本での彼等の任務がいかに大変で不安と冒険にみちたものであるかを書いている。<sup>(3)</sup>

1、千二百マイルの海のうえて（サンフランシスコを出発して） 一八七一（明治四）年、六月六日

故国の愛する幼い子どもたち、

メアリー、バーティ、キティへ

もし、あなたたちがこの「日本丸」という立派な船の美しい船室に座っている私を見ることができたら、そして私と一緒にきれいで新鮮な海の空気をかぐことができたなら、どんなにいいかしらと思えます。海の風は本当に涼しくて私の頬をこちよくなせていきます。もしも、あなたたちが私と一緒にデッキのうえて、今、航海しているこの広い太平洋を眺めることができたなら、どんなに素晴らしいと思うことでしょうね。

水のほかに何も見えないところなんて想像できませんか？ 船の端までいって見られる限り見渡しても、見えるのはただ水だけなのです。反対がわの端に行っても同じことです。私たちの周りにはみんな水、そして上はみんな空。木もなく、家もなく、人はこの船に乗っている人だけ。この船にはちょっとした村ができる位の人々が乗っていますが、船が大きいので人がいっぱいという感じは全くありません。

ん。

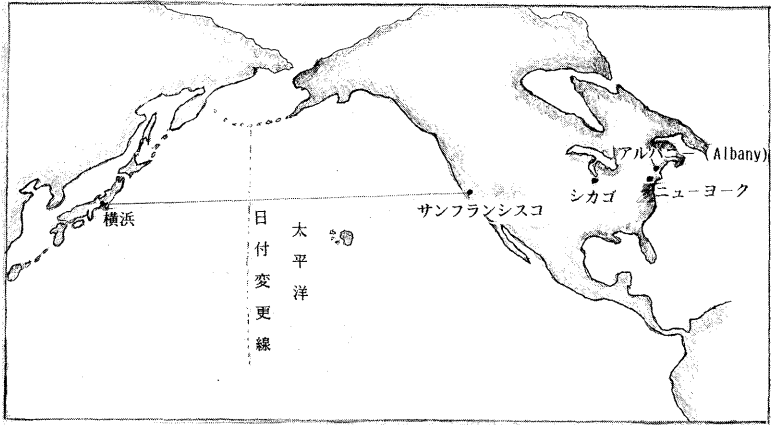
この船には子どもたちもかなり大勢います。キャプテンは子ども好きとみえ、子どもたちのためにデッキのうえにブランコを備え付け、みんなが楽しそうに遊んでいるのを見て嬉しそうです。でも、子どもたちにとって一か所にじっとしているというのは非常に長く感じられるものなのです。船が日本に着くまで三週間もかかります。そんなに長い間、文句も言わずおとなしくしているのはとても大変なことです。そう思いませんか？

給仕をする人々や船室などの世話をする男の人々はとても変わった恰好をしています。彼等は中国というとても遠い国から来ています。中国はアメリカからみて日本より遠いのです。この人たちの姿がとても変わっているのだからあなたが見たら笑いだすでしょうね。彼等はみんな男ですが、まるでドレスでも着ている女の人のように立派に女性の仕事をこなしています。頭の毛は頭のとっぺんだけ小さくまわく残して全部剃ってしまい、とっぺんの残された

毛はとても長くのびています。彼等はその毛をごわごわした沢山の黒の絹糸と一緒に編みこんでいて、新しく編みあげたばかりのときは長くつやつやしていて殆どかかるところまで垂れ下がっています。

三十人から四十人ものこのような男の人が長く垂れさがった髪の毛のしっぽを歩くたびにゆさゆさせたり、振りあげたりしながらテーブルでお給仕して忙しく立ち働く様子は本当にみものです。それから彼等はとても奇妙な靴をはいています。爪先がくるつとあがっていて、まるで足に小さなボートをくっつけているみたいです。そして長くて白い靴下と短くて青いズボンをはいています。…このほかいろいろありますが、故郷をあとにしてから私が見た面白いものをみんな一度にあなたたちにお話することはできません。追々あとの手紙で書くことにしましょう。できるだけ早くまた手紙を書きます。

さて、ここであなたたちにして欲しい事があります。毎晩お祈りのときに、日本の小さな子どもたちのために充分に働けるよう私を助けて下さいと神様



に祈って欲しいのです。日本の子どもたちも、あなたたちと同じように神様を愛することを学ぶことができると思います。この国の子どもたちは可愛そうに私たちのイエス様のことを聞いたことがないのです。だからイエス様がどんなに素晴らしい方か知らないし、どんなに子どもたちを愛しているかということも知らないのです。これこそ私が子どもたちに教えたことなのです。私のために祈ってください。私は神が子どもたちの願いを聞いてくださることを知っています。あなたたちが祈っていてくれると思うと私はとても嬉しいのです。

愛をこめて おばあちゃんより

\*

## 2、横浜に到着して

横浜にて

一八七二（明治四）年、七月二日

愛するメアリーへ

ここでは今、安息日（日曜日）の朝ですがアルバ

---

ニーはまだ土曜日の夕方ですね。というのは、あなたも知っているように私たちは東洋にいます。でも、ここへ来るために私たちは西へ向けて出発したのにそちらの時間のほうが遅いのは何だか変だと思いませんか？ いつか、このことについて説明してあげましょうね、それともあなたがパパに聞いてみますか？（米国から日本に来るとき太平洋のまんなかで日付変更線を通過するため日本のほうが一日早くなる）とにかく今、私はそれどころではないのです。大切な安息日の朝、あなたたちも同じだと思いますが、今、私は日曜学校に行く支度をしているところなのです。こちらが夜になって私たちが寢床に入る時刻になると、あなたたちは日曜学校に行つてイエス様のことや聖書のみことばについて勉強する時刻になるのですね。故郷の可愛い子どもたちが快適で恵まれた生活をしていることを考えるとき、この異教の街の子どもたちを見て悲しくなります。聖書や私たちの愛するイエス様についての知識が有ると無いではこうも違うものなのでしょうか。

---

ここでの安息日は私にはとても奇妙に思われます。ここでは外国から来た少数のクリスチャンが安息日を守っていますがこの土地の人々は誰も「安息日を覚えて、これを聖とせよ」という神の命令（十戒の一つ、神への礼拝の日として労働せず、休息日とした。出エジプト記二十・八）を知らないのです。それからキリスト教国から来た人たちも多くが良くない人たちが異教徒たちよりもっとその事を気にしていませんから、ここでは安息日といっても平日と変わりありません。お店はどれも開いているし、人々は船にのって魚をとりにつけて、田や畑で働いたり、物をついで売り歩くなど、ふだんの日と同じなのです。それを見ると私は悲しくなつて、天の父が私たちの幸せのために安息日を与えて下さっている事をこの人々に教えてあげたくてたまらなくなりました。でも、日本の言葉は私にはチンプンカンプンで彼等と話すことができないし、それについて理解してもらえないのです。ある立派な人たちが聖書を日本語に翻訳しようと一生

懸命に今やっています。それが完成すれば彼等もイエス様のことについて読むことが出来、まことの神は何か、神が彼等に何をさせたいと望んでおられるかが判ると思います。

ここにはとても多くの子どもたちがいます。私はこの子たちが大人に成長するまえに聖書がみんなに読めるように準備されて、彼等がクリスチャンの男性、女性に成長するように、そして親たちのように偶像崇拝者にならないようにと祈っています。この子どもたちは性質がとても良く、私が今までにみたどこの子どもたちよりも満足し幸せそうです。でも、もしあなたが彼等を見たらどうして幸せなのかと思うでしょうね。もしあなたがこのような貧しくて狭い家に住み、彼等の多くがそうであるように着るものがろくになくみすぼらしい身なりをしなくちゃならないとしたら本当につらいと思うでしょう。でも、この子どもたちはそんなことを少しも気にしていません。喧嘩もせず泣きもせず一日中遊びまわっています。私はまだこの子どもたちが

不機嫌にしているのを見たことがあります。この点についてはクリスチャンの子どもたちも彼等から見習わなくてはならないと思いますよ。もちろん、あなたたちはこの異教徒の子どもたちよりも、お互いに親切で仲良くしているはずだと思いますがね。

私たちは今度、子どもたちや少女たちに読み書きや私たちの神について教える学校を開くことになりました。昨日、一人の紳士が私に言いました。「このような学校は神さまがここの人々に下さった贈物ではないでしょうか」と。私も本当にそう思います。神様が私たちをここに呼びよせて下さったのですから、日本の子どもたちのために良いことができよう助けて下さると私は信じています。いつかまた、子どもたちの住んでいる家や着物や遊びかたなどについて書くつもりですが今日はこのくらいにします。

おばあちゃんより

※（ ）のなかの文は解説のため付記した。

二番目の手紙は横浜に到着して一週間たった二どめの日曜日の朝、日曜学校にいく前に孫のメアリーに書いたものである。

一八七一年（明治四）年六月二十五日、日曜日の朝、「日本丸」は霧雨のふるなか横浜港に到着した。ニューヨークを出発してから約四十日に及ぶ長旅であった。三人の婦人宣教師たちはJ・H・バラ宣教師の出迎えを受け駕籠ののって山手にある宣教師宅で暫く休息したのち、山下町の谷戸橋近くにあったヘボン博士の診療所で行われている日曜礼拝に出席した。

J・C・ヘボンについては、この拙論の（一）で多少はふれたが当時この横浜に居住していた医者であり、S・R・ブラウンや先に述べたJ・H・バラなどと共に日本の近代化の推進に開拓者的役割を果たした宣教師であった。これらの宣教師たちは、和英辞書の編纂、教会の設立、ミッションスクール、病院の設立など、その活躍はめざましく多くの分野で貢献した。「おばあちゃんの手紙」のなかに「ある立派な人たちが聖書を日本語に翻訳しようとして一生懸命に今やっています」とあるのは、ヘボン

ンやブラウンなどによって完成させた聖書の和訳をさしている。ヘボンは「ヘボン式ローマ字」で有名であるが聖書の邦訳は彼の終生の願いであり大事業であった。

「おばあちゃんの手紙」に「この子たちが大人に成長するまでに聖書がみんなに読めるように準備されて」ほしいとあるが、『新約聖書』は一八八〇（明治十三）年に『旧約聖書』は一八八七（明治二十）年に和訳が完了し出版された。明治十三年四月、翻訳委員社中が新約聖書の翻訳完了の感謝会を築地・新栄教会で開いている。<sup>註(4)</sup>この手紙の著者、ミセス・プラインが病気で帰国したのは一八七五（明治八）年であるから彼女が日本に滞在していたときには残念なことにまだ日本人に読める聖書がなかったのである。

さて、三人の婦人宣教師たちはとりあえず、横浜のホテルにいて混血児の養育と女子教育を行うアメリカン・ミッション・ホームの開設の準備にとりかかった。三人を最も悩ませたのは日本語の習得の難しさであった。一番早く日本語を覚えたのはミセス・ピアソンであったと<sup>註(5)</sup>いうが、最年長であった五十一歳のおばあちゃん（ミセ

ス・プライン)にとつて初めての日本語の習得は至難のことであった。この手紙に安息日の大切さを日本人たちに話したいけれど、「日本の言葉は私にはチンプンカンプンで彼等と話すことができないし、それについて理解してもらうこともできないのです」と心の焦りを訴えている。

この手紙に日本の子どもたちは性質が善良で不機嫌でなくどこの子どもたちより満足し幸せそうにみえるといった記事があるが、これはあながち日本へのお世辞とは思われない。こうした感想はこのあとの手紙にも何度か書いている。おそらく、当時の日本の子どもたちは貧しくはあったものの、自由な遊びの空間、時間に恵まれ、兄弟や親子の情愛もずっとあたたかいものがあつたからと思われる。みなりは汚くはあつたが、受験勉強などといったことはなく一日中遊びまわっていた元気な子どもの姿をおばあちゃんはこのように感じたのではないかと思う。

さて、三人の熱意と努力でアメリカン・ミッション・ホーム(亞米利加婦人教授所)は到着後わずか二か月の

ち、八月二十八日に開設された。場所はバラ宣教師の持ち家であつた山手四十八番館であつた。「おばあちゃんの手紙」の最後に「私たちは今度、子どもたちや少女たちに読み書きや私たちの神について教える学校を開くことになった」と書かれているのがそれである。これは混血児の養育と女子教育のための学校で、この学校が現在の横浜共立学園の今日に及ぶ百二十年の学園の始まりであつた。

(国立音楽大学)

註(1) 『横浜共立学園の120年』(写真集) 横浜共立学園

一九九一 25頁

(2) 『横浜共立学園120年の歩み』横浜共立学園 一九

九一 27頁

(3) 前掲書『横浜共立学園の120年』25頁

(4) 横浜プロテスタント史研究会編『図説 横浜キリスト

教文化史』一九九一 137頁

(5) 前掲書『横浜共立学園120年の歩み』35頁